

Title	ミュージアムの思想と制度
Sub Title	The idea and institution of museums
Author	松宮, 秀治(Matsumiya, Hideharu)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.611(611)- 633(633)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 三田史学会シンポジウム論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0611">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0611</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ミュージアムの思想と制度

松宮 秀治

## 一 西欧「近代」による世界の再整序としての ミュージアムの思想

ミュージアムとは、西欧近代が創出した諸価値とその諸価値を理論的に整合性を持った思想にまで形成しようとする諸概念が複合的に集結している施設や制度である<sup>1)</sup>。したがって、それはわれわれがその訳語として慣用的に用いている博物館と美術館の概念枠のなかでその思想を全体的に捉えることのできるものではない。日本が明治に入って、この西欧のミュージアム制度の移入と定着を推進していくなかで、その複雑で複合的な思想の全体性を総合的に理解しようとする努力よりも、理解可能な方向で、その複合性と思想の多様性を恣意的に分断し、簡略化してしまったため、その概念の日本独自の理解と定

着を方向づけてしまった。

西欧近代が創出したミュージアムという制度と思想は、博物館や美術館機能に限定されるものでなく、動物学ミュージアム（動物園）、植物学ミュージアム（植物園）や図書館、文書館、古文書館を含むだけでなく、古城や城址、廃墟、記念碑的建造物、自然公園や希少動植物棲息区やそれらの保護区、少数民族保護区やその指定生活地区、そして二〇世紀以後に新たに加えられてきたフィルムライブラリー、水族館、プラネタリウムを含む各種科学センター類や各種のスポーツの殿堂、さらにはミュージアム概念にとつては最も新参のものでありながら、近年では美術館や博物館を凌駕する勢力を持つようになってきた世界遺産までも含む広領域の設備と制度を生み出す潜勢力をもった思想なのである。

わたしがミュージアムを論ずるとき、それを「博物館」や「美術館」という概念に置きかえることを意識的に回避するのは、それらがミュージアムのごく一部の機能しか指示していないからである。ミュージアムはすでに述べたように、西欧の近代がそれまでには組織化しえなかつた人間の世俗的欲望とその価値を組織化し、さらには体系化し、視覚化する装置として生み出され、発展してきた制度である。いいかえればミュージアムとは西

欧の近代が新たに創出した近代の諸価値を理念的に整理し、組織的に体系化していくなかで、人間の精神と知的活動領域が進歩という理念的目標を見出すことで人間の知的活動領域は無限の進歩と拡大を期待できるといふ近代のオプティミスティックな進歩主義と無制限な欲望解放主義と連動して、その思想と制度を展開、拡大させてきたものである。いうなればミュージアムとは、啓蒙主義の「世界」の発見と人類の進歩の理念、ロマン主義の「国民国家」の発見と国民、民族の個性的発展が近代の資本主義的な経済体制のもとでの人間の欲望解放と連動するなかで、人間による世界掌握と世界支配と制覇を理論的に承認する思想と制度をつくりあげてきたもの、さらには現在もおつくりあげていっているものであると

いえる。いうなれば、それは西欧の「近代」が有するポテンシャルな潜勢力ともいふべきものである。

ミュージアムの潜勢力とは、たえずその支配領域、管轄領域を拡大し続ける力のことである。わたしたちは通常ミュージアムを公益を主眼とする文化施設、社会的な教養の向上と発展に奉仕する教育施設、さらには上質な娯楽の提供施設ないし制度と考えている。いうなれば、それは負の価値をもたず、専ら正の価値から成り立っている静力学的な、人間精神の安定化作用と結びつき、さらには自国の「国民文化」の価値の保証と確認する、つまり自尊心の拠り所となるものの集約の場と装置と考えている。このようなミュージアム概念をひとびとに強く植え付けてきたのは、西欧諸国のミュージアム法に結実し、さらにそこから再放出されてきたミュージアム概念の一般化であつたといえる。

ミュージアムが社会の公共的な教養や文化財の社会的な共益の利用の施設であり、制度であるという概念を浸透させてきたのは、近代のミュージアム制度がはじめ「ミュージアム法」という法的規定のもとに出発したブリティッシュ・ミュージアム(大英博物館)の設立以後のことである。それ以後ミュゼ・ルーヴル(ルーヴル美

術館)からすべての西欧のミュージアムは、各国のミュージアム法の規定のもとで設立、開館、運営されてくることになる。ついにながら、日本の場合は西欧と異って、その制度を明治初期にすでに西欧から移入しながらも制度的な法的整備を欠いたまま、戦後の一九五一年(昭和二六年)におくればせにも国会の議決を経た「博物館法」を制定し、公布するという変則的な経過を有しているのである。このことはとりあえず措くことにして、ミュージアムが社会の共益的な教養施設、文化施設として、そこから負の価値の意識を払拭させてきたのは、西欧のミュージアムがそのミュージアム法をもって、その正の肯定的な価値をひとびとに植え付けてきたためである。その西欧のミュージアム法の集約的な思想を最も端的に提示しているものが一九五一年のユネスコの「国際博物館評議会」(I.C.O.M. = International council of museum)のミュージアム規約(Statutes)である。

この規約におけるミュージアムの定義とは、「芸術的、歴史的、科学的、技術的な事物のコレクション……等々、文化的価値を有するひとまの要素を、様々な手段によって、保存、研究、評定し、なによりもまず公衆のレクリエーションと啓蒙のために展示することを目的と

し、一般の利益を考えて管理される恒常的施設」となっている。さらにこの定義は二四年後の一九七五年には次のように改められている。「ミュージアムとは、公衆に開かれ、社会とその発展に奉仕し、かつまた、人間とその環境との物的証拠に関する諸調査を行ない、これを獲得し、それらを保存、報告し、しかも、それらを獲得し、それらを研究と、教育と、レクリエーションを目的として陳列する、営利を目的とせぬ恒常的な一機関である」(西野嘉章訳)。

一九七五年のこの定義の改変は、一九五一年の定義の「芸術的、歴史的、科学的、技術的な事物のコレクション」と「文化的価値を有するひとまの要素」という二つの規定があまりにも西欧の近代主義を前面に据えすぎたためである。いいかえれば、前者があまりにも西欧近代のミュージアム理念の本質そのものに則しすぎていたため、つまりこの規約が西欧の近代価値を集約的に表現しているために、非西欧世界において西欧近代価値がなぜ、「芸術」、「歴史」、「科学」、「技術」に集約されるのか理解されにくいためであり、後者の「文化的価値を有するひとまの要素」の規定が、ミュージアムの内包領域を人文科学的な研究、調査に限定される、歴

史価値的な文化財を指示し、自然科学的な動植物、自然遺産をミュージアム概念の外に置く要因となる危惧をいだかせるためである。ともあれ、上記のようなユネスコの国際ミュージアム評議会の「ミュージアムの規約」は、ミュージアムという施設、制度が人類社会にとつての公益機関であり、人間の教養的財産の保存・保護と人間教育と芸術、歴史、科学、技術の研究と公開性の原理によつて啓蒙活動と上質な娯楽の提供を旨とする機関、いかえれば人間活動をポジティブでプラス評価のみしか考えられない思想と制度にささえられた機関だという考えを植えてきた。

それゆえ、ひとびとはミュージアムというものを肯定的な価値を前提に考え、論じてきた。したがって国家がミュージアムへの関心を消極的にしか示さず、その予算配分に積極的な姿勢しか示さないときは、文化の後進性が非難されるのが文化行政批判の常套的な言辞となつてきた。このように人間性の内面的活動と文化活動とのみ関連づけて思考され、語られるミュージアムが常に与えつづけてきた印象は、それが静穏でスタティックな施設であり、制度、思想であるというものだった。つまりミュージアムが与える印象は、主体的に人間生活に干渉

してきたり、一方的に人間生活に侵入し、支配しようとするのとは無縁で、中性的かつ中立的のものである。人間がそれに対して主体的にかかわることはあつても、ミュージアムはあくまで受動的で、そこから人間活動や精神活動にかかわることのない、能動的作用とは無縁なものという印象と思念を与えてきた。

だが、ドイツの特異な思想家で、作家であるエルンスト・ユンガーは、その著『冒険的な心』(一九三八年)というエッセイ集の中の「ムゼウムにて」という一文の中で、この静穏で、静力学的な印象を振り撒いてきたミュージアムが、実は暴力的なまでに動的で、侵略的な性格のものであることを指摘している<sup>3)</sup>。彼はその暴力的で侵略的な力を「ミュージアムの衝撃力」(der museale [F]orce)と呼び、ミュージアムという制度と思想の持つ破壊的で動力学的な力に警告を与える。先ず彼はミュージアムの見せかけ上の静力学的な性格について、「ミュージアムの衝撃力がすでに獲得し、いまなお獲得しつづつある力と範囲についてわれわれは容易に欺かれるのである」と注意を喚起させ、まづその力に気づくためには「教会堂がミュージアムに変貌するその仕方を考えるなら、われわれはこの衝撃力の振う途方もない力につ

いてひとつの思いを得ることができよう」と、西欧人にとって最も身近な教会が信仰の場から観光客の訪問地としての美術館へ役割転換されている事実には思いを致すように勧める。そしてそのあと次のように本論に入っていく。

ここで問題なのは、ミュージアムの衝動力が副次的なものにまで侵入する領域である。この衝動力が最もはつきりと最大級のタブーの形をとってくるのは自然保護と文化財保護の領域である。その監視範囲は、とるに足りない昆虫から広範囲な国立公園まで、ますます増大する対象物にまでおよんでいく。今日ではミュージアム的なタブーが適応されるものに、花、樹、湿地、家屋、都市、さらに人間がある。最も想像力に富んだひとでさえ、そのゆきつく先を測定しえないほどである。

この引用文の最後にあるように、ユンガーのいう「ミュージアムの衝動力」の破壊的ときえいえる世界侵蝕力は、「最も想像力に富んだひとでさえ、そのゆきつく先を測定しえないほどである」と予言どおり、ますます

す強力なものにしてきている。ユンガーの先見性は驚嘆に価すべきものであるが、ここでは彼の先見性について語りたいのではなく、彼のミュージアム思想と制度に対する本質的な洞察力について語りたい。

ユンガーのいう「ミュージアムの衝動力」とは、西欧の近代というまったく新しい世界解釈の思想が前近代や非西欧的な世界解釈を無力化、無意味化させながら、西欧近代が発見した科学、技術、芸術、歴史という新しい概念体系によって再整序し、やはり西欧近代が新たに発明した文明と文化という観念のもとに世界を再構成していくこうとする歴史世界と自然世界の侵略意志の謂である。ユンガーのいう「ミュージアムの衝動力」とは字義を直訳したものであるが、その意を汲んでいうなら「世界のミュージアム化への衝動力」ということになる。ミュージアムとは彼の指摘によってはじめて、その暴力的で破壊的なまでの世界支配、制覇意志を内在させている思想と制度であることに気づかさされたのである。いいかえれば、西欧の近代価値によって世界を一元化しようとする意志を内在させたものであることが明らかにされたのである。そのことは、一九七二年のユネスコの世界遺産協定の制定や、本来は生物と環境との相互作用を研究

する学問を意味していたエコロジが「ディープエコロジ」という社会運動にまで発展し、はじめは持続的な自然利用、自然との共存、景観保全の思想であったものが次第に自然の美と崇高性、生物の尊厳と不可侵略性の承認までに進んできている。

エコロジ思想がこのように「保全」(conservation) から「保存」(preservation) さらに「保護」(protection)へと進んできたのも、ユンガーの「世界のミュージアム化の衝迫力」の進展であり、「ミュージアムのタブー」の拡大プロセスである。

## 二 近代国民国家の新しい祭祀施設としての

### ミュージアム

オーストリアの美術史家ハンス・セードルマイヤーの『中心の喪失―時代の徴候と象徴としての一九・二〇世紀美術―』(一九四八年、邦訳は一九六五年、ただし、副題は「―危機に立つ近代芸術―」となっている)<sup>④</sup>は、近代の造形芸術、つまり近代美術が真の創造精神を喪失してくるのは、「美術ミュージアム」という近代特有の「美の殿堂」の思想によって美術作品の製作の規準がそこに集約され、収斂されることで、芸術の価値が歴史化

され、相対化されることで中心点が消失してしまったためであるという考えを提出している。

彼はフーベルト・シューラーデの『美的教会堂』(一九三六年)<sup>⑤</sup>という著作において、「美的教会堂」としてのミュージアム概念が成立しえるのは、そこでは「ヘラクレスとキリストが兄弟となり、神としての両者が消え去るようになってはじめて、それらは芸術の殿堂のなかで、他の属性をすべて包んだ神性の顕現として、新たな仕方で見られるようになるのだ」という文章を引用して、諸宗教の神像はそれが本来めざしていた神聖性が剥奪されてはじめて、ミュージアムにおいて「芸術」という近代が創出した新しい聖性と神性が与えられるという。そしてこの近代芸術が提示する聖性は、あらゆる宗教を過去のものとして解消し、それに代って、自然的汎神論に対応する芸術汎神論を出現させてくるという。つまりミュージアムは宗教という絶対的な神聖価値を歴史主義的に相対化し、その宗教的聖性を喪失させ、世俗価値のなかで別の神性を与える機能を果すのである。

この機能をエルンスト・ユンガーの「ミュージアムの衝動力」と関連づけていうなら、ミュージアムという制度と思想は、宗教という絶対的な聖性と権威を破壊し、

相対化し、世俗化する攻撃性と破壊力をその裡に内在させているものなのである。そしてそれは宗教を破壊させるだけではなく、王権の不可侵性や絶対性や王朝の正統性、支配の正当性をも、人間の自然権の理論的整備と国民の自然的権利の要求の前ですべて相対化される。なぜならミュージアムとは、人間活動のすべてを理念的に歴史主義化し、相対化する機能をその本質としているからである。ミュージアムとは、すでに述べたように、またユネスコのミュージアム規約の定義が明瞭に示しているように、西欧近代が新たに創出した「芸術」、「歴史」、「科学」、「技術」の四つの価値体系にその中心的価値を還元されるものだからである。また、それらの価値体系は、人間の活動を神や超越者という絶的な権威や伝統的権力という絶対者の勢力圏から解放し、被造物としての存在、天命という運命の絶対性にとじこめられている存在から解放して、人間を歴史と世界の主体的創造者にするために発明された「文明」と「文化」の概念によって整序する概念体系であるからである。いいかえれば「文明」と「文化」は、芸術、歴史、科学、文化をそのコンノテーション（客観的内包、全体的内包）とすることで絶対的価値を相対化し、歴史を相対化する。文化は、

人類の歴史全体、つまり世界史を暴力的に再編成、再構成しなおすために案出された概念であるゆえに、文化を芸術、歴史、科学、技術という概念体系で整序していく機能を集約的、集中的に自己の内に取り込んでいくミュージアムが、過去の神聖価値や絶対価値を徹底的に解体させ、新たな近代価値の思想と理論で再構築していくのは当然である。

具体的には、ミュージアムの実態に則して考えてみよう。ルーヴル、エルミタージュ、トプ・カプ・サライ、故宮という革命によって王政を打倒し、王家の私的財産を国民の共有財産に転換させることに成功した諸ミュージアムは、その典型的な例証である。これらは、文字通り革命という暴力と破壊力で過去の歴史、伝統を相対化し、過去の宮廷財産、教会や寺社の宗教財産を新しい近代価値で再編成し直し、国民の文化財、教養財となした。この意味で、ミュゼ・ルーヴル（ルーヴル美術館）の開館は、革命による王制打倒の象徴的記念碑である。つまりそれは、革命政府によって旧体制の絶対主義体制とキリスト教の宗教的権威が崩壊させられたことの象徴的記念碑そのものとなるのである。しかし、これはよく考えるときわめて不思議なことである。なぜなら、革命政府は



自らは何にひとつ蒐集事業を行わず、単に王家のコレクションを収奪し、その意味づけを変えたにすぎないからである。つまり、それは王家が累代の努力を通じて蓄積してきた宮廷コレクションの意味コードを転換させたものにすぎないからである。

実は、ミュージアムの本質はまさにここにあるのである。それはどのような手段でその内包物が蒐集されたかではなく、その内包物がどのような意味コードに置かれ、いかなる新しい価値を賦与されるかが重要なのである。いいかえると、ミュージアムとは、かつてはそれを所有し、自由にしうるものが特定の権力の相対性を証明したのであり、特定の個人的な王侯貴顕の私的な財宝であったものを非個人化し、それを人類や国民の共有財に転換させる思想と制度、機能を意味するのである。

したがって、ミュージアムがその内包領域を拡大すればするだけその機能も多様化し、新たに意味コードを増大させる。前近代が自らのイデオロギーの流布手段にしたものを、近代革命はそれを自らの裡に取り込んで、革命と近代価値のイデオロギーにその意味コードを読み変えさせる作業に着手する。いうなれば、敵のマナを奪取して、それを自らの霊力と呪力に転換させるのである。

ミュージアムは「もの」だけを自らの内にとり込んで、その意味コードを変換させるのではなく、「歴史」という非物質的な領域をも取り込んで、排除すべきものは無力化や相対化し、利用価値のあるものは自己のイデオロギーの意味コードへの転換をはかるのである。革命が宮廷コレクションをミュージアムという思想と制度のなかで、「芸術」、「科学」、「技術」という近代の価値体系で意味コード化し、旧王室のマナを自己の霊力に転換させたように、革命は旧体制の絶対主義王政がその王権の權威とその政治理念のプロバガンダの中心に据えていた祝祭政治を近代の「歴史」という価値の意味コードで革命の正当性のプロバガンダに転換させていく。フランス革命がシャン・ド・マルスを革命祭典の広場に整備し、一七九〇年の七月の「連盟祭」、九二年四月の「自由の祭典」、同年六月の「法の祭典」、九三年の「理性の祭典」、九四年の「最高存在の祭典」と大規模な祭典を矢継ぎ早に行なったのは、単に革命政府の政治手法だけの問題ではなく、革命政府が「歴史」という近代独自の価値体系にまで絶対王政のマナを取り込む努力の一環と考えなければならぬものである。それは、ルーヴル宮のミュージアム化と同一線上で考えられなければならないのであ

る。

その意味で、一七九一年四月のミラボーの葬儀を機に、サント・ジュヌヴィエーヴ教会が立憲議会でパンテオンと改称され、以後それが国民的英雄の祝祭的葬儀場となったことは、革命祭典もルーヴルのミュージアム化もサント・ジュヌヴィエーヴ教会のパンテオン化も、すべて革命政体の国民祝祭の祭典行事と祝祭空間の設置思想と連動したことを示している。したがって、クシシトフ・ポミアン<sup>6</sup>がその著『コレクターたち—アマチュアと好事家—』（一九八七年、邦訳は『コレクション—趣味と好奇心の歴史人類学—』（一九九二年）で次のようにいつているのは、いくつか留保条件をつけるならまさに当を得た意見といえる。

ミュージアムは、ひとつの社会のすべての構成員が同じ祭式を執り行うことで一致共同する場所として、教会にとつて代るものとなる。したがってミュージアムの数は、一九・二〇世紀となり、人々、とりわけ都住民の伝統宗教に対する無関心が拡大するにつれて、増大する。このようにして、もはや社会全体を包括することのできなくなった古い祭式にとつて代る新しい

祭式は、国家が同時に主体となり客体となるような祭式である。それは、国家が国家自身に捧げる恒常的敬意であり、あらゆる角度から見た国家の過去や、国家を構成し、それぞれが全体の繁栄に貢献をもたらしたと見なされる社会、地域、職業団体や、その内部に生まれ、じつに多様な領域において長く残る作品を残した偉大な人々をたたえることで行なわれる。（吉田城・吉田典子訳）

ポミアンがいうように、ミュージアムとは「ひとつの社会の構成員が同じ祭式を執り行うことで一致する場所として、教会にとつて代る」ものとなった近代の国民教会である。つまり、それは「国家が同時に主体となり客体となる祭式」によって、ミュージアムという祭祀場において、「国家が国家自身に捧げる恒常的な敬意」によつて国家と国民の新しい歴史が創出され、その歴史が神話化されるということを意味している。その意味でミュージアムとは、まさにひとつの大きな機能として国家の歴史に神話的価値を与える機能をもった装置なのである。

ミュージアムがこのような歴史の神話化の装置になり

うるといふ思想を、まだミュージアムが制度として誕生するはるか以前に見抜いていたのがフランシス・ペーコン(一五六一—一六二六)の『ニュー・アトランティス』(一六二七年)である。この著作は、ほとんど未完に終るべきだったものが、かろうじて完成を見た作品である。以下の引用部分はその最も終りの部分で、あとの祭礼の部分は未完に近いものなので、その展示場の部分のみの引用にとどめたい。コンテキストは、ニュー・アトランティスという、島全体がさまざまな研究施設と実験施設と世界全体から蒐集した物品を集積させている巨大なミュージアムの様相をもった架空の島である。その最高の統括機関がソロモンの館であり、その長官である長老がソロモンの館の二つの大ギャラリの展示施設と礼拝施設について、島への不時の漂着者であるわれわれに説明した内容ということになっている。

展示と礼拝に関していえば、たいへん立派なギャラリが二つある。そのひとつには著く優れた発明品の模型と原型が展示されており、他のひとつには主だった発明家たちの像がならべて置かれてある。そこには西インド諸島の発見者であるあなた方のお国の人コロン

ブス、船舶の発明者、大砲と火薬を発明したお国の修行僧(ロジャー・ペーコンのこと)、音楽の発明者、文学の発明者、印刷術の発明者、天文学上の諸事案の発明者、ワインの発明者、麦とパンの発明者、砂糖の発明者、こういう発明者の像があなた方の間の伝承よりももっと確実な根拠によってつくられて展示されている。ここにはまたわが国の優れた発明家たちの像とその発明品のサンプルも多く置かれているが、それらの発明品を見たこともないあなた方にそれを説明するとあまりにも長いものになってしまうし、また誤解を生じさせてしまうことになるだろう。ともあれ、わたしたちは価値ある発明をおこなったあらゆる人物—それがわが国の者であれ、他国の人々であれ—その人物の像を建て、十分な名誉と多額の報償を与える。これらの像は、あるものは青銅製、あるものは大理石あるいは玄武岩製、またあるものは金で塗装された香柏材製あるいは特別な木材製のものである。またあるものは鉄製、銀製、金製といったものもある。

この文章は一読、叙述の前近代的な印象のため、その真意の判読を困難なものにしているが、これが書かれた

のが世界最初のミュージアムであるブリティッシュ・ミュージアムの成立に先立つこと百数十年前であり、近代最初の科学・技術ミュージアムの建設には二〇〇年も先立っていることを勘案すれば、その先駆性は十分に読み取ってもらえるであろう。ともあれ、これはコレクションがいまだ宮廷のヴンダーカマーやクンストカマーに代表され、蒐集の対象が「ミラヴィリア」という珍奇物、驚異物、希少物か「レガリーエン」とよばれる品々や王権を象徴し荘厳化する物品、さらには「レリークイエン」とよばれる聖遺物を中心になされていた時代に書かれたものである。

すでに述べたように、現在の世界の代表的なミュージアムは、そのほとんどがかつての当該諸国を統治していた専制主義的な王家の私的コレクションを近代の国民国家の国民の共有財産に移行させたものである。それは王制打倒の記念碑として、近代国家と近代のミュージアム制度の成立を宣言する象徴的な意味をもつものであった。前近代の宮廷コレクションも、たしかに王朝の歴史を神話化し、帝権・王権の統治を正当化する機能を果たしていた。ただ宮廷コレクションと近代ミュージアムは、同じ機能を果たしながらも、その意味と意義は異なったものとな

る。前者は超越的な神聖価値と世俗価値とが分断された品々によって構成されたものであるのに対し、後者はペーコンの引用文が明確に指示しているように、世俗価値、いかなれば実生活に有用な品々とその発明者の顕賞によって現在の価値と未来的価値という非超越的な現世的な世俗価値を救出しようとするからである。

### 三 神の被造物としての人間を世界の主体的創造者とするミュージアムの思想

ミュージアムの思想とその成立について考えるなら、ルーヴルに代表されるような革命的成立、つまり打倒した王朝の私的財産を暴力的に国民の共有財産として位置づけることから出発したものと、真の意味での西欧ミュージアム制度の嚆矢となったブリティッシュ・ミュージアムのように、近代価値の理念的揭示と人類の進歩の理念的目標を近代的法制度のもとに掲示することに至ったものがある。ブリティッシュ・ミュージアムの開館はかなり偶然の要因が関わっていたものであったにせよ、イギリス政府が議会決議を経て、法的な基礎づけをもってミュージアムを成立させた条件が整っていたのである。その条件づくりの基礎を与えたのは、前章で

みたフランシス・ペーコンの『ニュー・アトランティス』で展開された実験科学の思想である。そこにはソロンの家という一大科学技術研究センターがあり、長老とよばれる長官のもとでさまざまな科学、技術の実験が立案、実施され、その実験のデータの整理・分析を基に、新しい技術と製品が開発される。それはかりでなく、そこからはさまざまな使命を与えられた調査や他国のすぐれた発明品、有用な物品ないしそのデータを持ち帰る役割を果たしている。まさしく現代にもそのまま通用する科学、技術開発思想である。なぜペーコンがはるか時代に先駆けて、このような思想に達したかは、彼の次のような言葉が明らかにしてくれる<sup>(8)</sup>。

二千年もの間、諸学問が停止したままほとんど同じ状態にとどまり、何ら注目に値する進歩をなしとげていないということが起っているのを我々は見ている。それどころか最初の創始者の下でもっとも栄え、その後には衰退しているのである。反対に、自然や経験の光に基づいた機械的技術においては、それとは逆のことが起っているのがみられる。それらの技術は(盛んに行われているかぎり)なにか生氣によって充されてい

るかのように絶え間なく成長し前進する。初めは粗野であっても、次いで使いよいものになり、最後には洗練されて、絶えず前進するのである。(伊藤和行訳)

この文章は『ノヴム・オルガヌム』の第七四から取ったものであるが、これは彼の実験主義思想と機械哲学の中心を要約するものであるので、同書の別の箇所にも、『学問の進歩』にも『大革命』の冒頭のテーゼとその説明にも、くりかえし述べられている。これは同時に、西欧の「近代」思想の中心でもある。「近代」とは脱權威主義思考の勝利であり、人間社会の活動全体を宗教的な神的超越者の支配と伝統社会の權威的思考の支配から解放して、人間の主体的な意志で自ら決定し、その人間社会の活動全体から新しい人間価値の体系を再構成しようという思想である。ペーコンに則していえば、人間は伝統社会の規範的な權威主義思考から脱して、自らが自己の知見を信頼し、技術を改良・改革し、社会生活全般の必需品の生産を拡大・増大させ、人類全体の生活を向上させることこそが学問の本質の目的であるということになる。

つまり学問とは、人類社会の進歩に資すべきものであ

る。なぜなら、「進歩」とは、のちにイギリス思想の功利主義的な方向を決定していくように、人間社会の最大多数の最大幸福を目標としての社会改良、技術革新、思想変革をその裡に内包する概念だからである。ブリテイツシユ・ミュージアムは、まさにペーコンの科学・技術思想とイギリス近代の功利主義思想を基軸に、直接的な理念的目標として人類生活の福祉と向上を基軸に設立された機関であり、施設だったのである。それは人類生活の福祉と向上に役立つ科学や技術の発展の精華である発明品や発見品、人間の科学的・技術的思考にヒントを与える自然物やその標本類、さらには人間活動の全貌を類推可能にしてくれる過去の記録文書や図書類とその収蔵、蒐集、展示の対象とする思想である。

いふなれば、ブリテイツシユ・ミュージアムを先頭にする科学技術系のミュージアム、ルーヴルやヴァチカン・ミュージアム（一七七二年）、ミュンヘンのグリコプトテーク（古代ギリシア・ローマ彫刻館）のような美術ミュージアム、さらには図書館、古文書館、フィルムライブラリーや各種歴史遺構のような人文系ミュージアムは、その出発点にあってすべて、人間精神と生活の「進歩」の精華を蒐集、展示する役割を与えられた機関

だったのである。つまりミュージアムとは、人間の歴史的活動の成果を近代の「進歩」の概念のもとに捉え、それを「文明」と「文化」の概念枠のなかで芸術的成果、科学的成果、技術的成果に分類して蒐集、研究、展示、保存する役割と機能を与えられた諸施設・諸機関の集約概念なのである。

ミュージアムとは、『ニュー・アトランティス』のソロモンの館の展示ギャラリーがそうであったように、ここに展示されるものは人類の歴史の進歩に貢献した発明・発見者たちの像である。ここで顕彰されるのは、前近代社会にあって歴史的価値の中心におかれた聖遺物や宗教的奇蹟の証拠物でも、殉教者や聖人の事跡でもなく、王冠や王笏、王杖という王権や帝権の地位権標でも王侯貴頭の肖像画でも彫像でもない。戦争や遠征、冒険の英雄たちの戦利品、略奪品、獲得品でもない。近代のミュージアムに収蔵され、展示されるのは、人類の歴史の進歩を物質的・精神的に促進させた歴史的資料と美術、工芸品である。いふなれば西欧近代のミュージアムとは、人間の歴史意識、歴史認識の転換装置ともいふべき役割を果たすものとして創出されたものである。なぜなら前近代の人間の歴史意識は、宗教社会と伝統社会の権威主義的

思考、規範主義思考内にとどめられ、人間の歴史は基本的に終末史観、没落史観という下降史観から脱することができず、人類の歴史ははじめに最盛期、黄金期があり、次第に下降線をたどって、最終的には没落的終末に至るという思考にとどまっていたからである。ペーコンの引用文も、科学・技術が伝統主義思考と規範主義思考のために、過去の権威を脱することができなかつたため、諸学問の思考全体が「最初の創始者のもとでもっとも栄え、その後は衰退」の道をたどり、「停止したままほとんど同じ状態にとどまる」という思考に、学問分野だけでなく、人間生活の全領域を支配されていたことを意味していた。そして、その伝統主義思考、権威主義思考から新たな価値体系を創出するために案出されたのが、「進歩」という概念であり、その進歩の概念のもとに人類の歴史を再構成、再構築することを可能にしたのが「文明」と「文化」という概念だったのである。

ミュージアムは、この「文明」と「文化」の概念を軸にして人類の歴史全体を「科学」、「技術」、「芸術」という価値体系の範疇的区分化を推進させていく。したがってミュージアムの思想が再構成しようとする人類の歴史は、天地創造から終末にいたる世界、つまり、神の

被造物として神の摂理と恩寵のなかに置かれている世界が例外なく、予定調和的にその運命のもとに服すべき汎世界的な「普遍史」ではなく、個別的な民族、国家、地域、団体などがその構成員の主體的な意志と活動によって、それぞれ異った個性と歴史性によって相対的な価値もつ「世界史」になる。いうなればミュージアムの思想が構成しようとする人類の歴史は、神が創造したコスモスの普遍的な同一基準に支配された年代記的事件の展開ではなく、地球という風土、気候、ファウナ、フロラという動物相、植物相を異にする諸地域の条件の相違のなかで、人間がそれぞれ個別的に形成してきた「文明」、「文化」のかたちの異同のなかに捉えられた歴史である。したがって、歴史は伝統主義社会や権威主義社会におけるそのように、特定の選ばれし人びと、つまり王侯貴顕や殉教者、聖人、英雄豪傑の勲功や神の御業みわざや奇跡まじなの記録ではなく、国家や民族、団体、集団の個別的な活動の記録となる。つまり、歴史は文明史、文化史となることで、政治史、経済史、技術史、科学史、思想史、宗教史などに分岐し、人間活動の相対化が重層的、複合的に進行することになる。だがここに歴史のパラドックスが出現する。人類を「進歩」という理念で解放した歴史、

国家や民族を相対化した歴史が、民族や国家を序列化し、差異化し、西欧の優位性と絶対性の論拠の形成手段となってくるのである。

#### 四 ミュージアムの思想と制度は西欧の近代価値によって世界の一元化をめざす

前近代の宗教的・王権の社会の規範価値観と権威主義の身分的、階級的な貴賤、聖俗の価値的拘束から人間を解放した近代の進歩主義的な歴史観が、人間を再び文明価値、文化価値によって差異化し、序列化していく逆説はなぜ、またどのようにして生ずるのか。身分価値、信仰価値のなかで、貴賤、聖俗価値のなかに拘束された人間は、進歩主義の人間観が発見した自然権の思想のもとで、基本的な生存権を保証され、さらに進んで法のもとでの平等、信仰、信条、言論の自由という平等権と自由権を獲得することができた。だが、この自然権を特定国家、民族、集団がどの程度実定法として自然法化し、人びとがどのくらい自由と平等を自己のものとなしうるかということ、つまりそれが人間社会の進歩の度合を測る基準となるということで、国家や民族や地域が序列化され、等級化されるという結果を招いてくる。その代

表的で典型的な例をヘーゲルの『歴史哲学講義』の次の一文のなかに見ていくことにしたい。<sup>9)</sup>

精神は自由だ、という抽象的定義にしたがえば、世界の歴史とは、精神が本来の自己を次第に正確に知っていく過程を叙述するものだと、いうことができる。そして、萌芽のうちに樹木の全性質や果実の味と形が含まれるように、精神の最初の一步のうちに、歴史の全体が潜在的にふくまれています。東洋人は、精神そのもの、あるいは、人間そのものが、それ自体で自由であることを知らない。自由であることを知らないから、自由ではないのです。かれらは、ひとりか自由であることを知るだけです。が、ひとりだけの自由とは、恣意と激情と愚鈍な情熱にほかならず、ときに、おとなしく、おだやかな情熱であることもあるが、それも氣質の気まぐれか恣意にすぎません。だからこのひとは専制君主であるほかに、自由な人間ではありません。――ギリシア人においてはじめて自由の意識が登上してくるので、だから、ギリシア人は自由です。しかし、それらはローマ人と同様、特定の人間が自由であることを知っているだけで、人間そのものが自由で



あることを知らなかった。プラトンやアリストテレスでさえ、知らなかった。だからギリシア人は奴隷を所有し、奴隷によつて美しい自由な生活と生存を保証されていたし、自由そのものも、偶然の、はかない、局部的な花にすぎず、同時に、人間的なものをきびしい奴隷状態におくものであったのです。—ゲルマン国家のうけいれたキリスト教においてはじめて、人間そのものが自由であり、精神の自由こそが人間の最も固有的本性をなすことが意識されました。(長谷川宏訳)

前近代社会の先験的身分序列と階級性の概念、そこから必然的に引き出されてくる人間の思想の能力の先験的決定性の概念を打破すべく、近代の哲学は人間理性の普遍的同一性と自然権の平等性の理論を構築することで、普遍的な人間性の価値、つまりフマヌスやフマニテートという近代の新しい人間価値を理念から実体へと推進させてくることができた。つまり、近代哲学において普遍的理性を共有する人間は、理性において対等であり、自然権の生得的な天賦的な所有においても対等なはずであった。しかし、デカルトの「理性」が、先験的に第一理性においては対等・平等でありながら、後天的・経験

的な第二理性(悟性)においては各人間集団の歴史的経過のなかで理性使用の能力の差位を生じさせるという方向に進んでいったように、このヘーゲルの引用の「自由」(これは人間理性の使用能力に応じて与えられるものとされている)の精神の世界史的展開の民族間差異の原因として捉え直されることになる。つまり「世界の歴史とは精神が本来の自己を正確に知っていく過程を叙述すること」ということになる。いいかえれば、ここで「理性」や「精神」の先験的平等性の理論はいとも簡単に、先験的、生得的な不平等性の論理に転換されてしまうのである。

西欧近代哲学の形而上学理論が指定した人間理性の普遍性は、経験論的な政治哲学や歴史哲学の思考の中で、はやくもその先験的平等性の理論的修正をせまられ、先験的不平等論へ変更される。それは先のヘーゲルの引用のなかで語られているように、「萌芽のうちに樹木の全性質や果実の味と形が含まれているように、精神の最初の一步のうちに、歴史の全体が潜在的に含まれている」という歴史の発展の素質論、因子論へと転換されてくる。要約すればベーコン、ホッブズ、ロック、ヒューム、ベンサムというイギリスの功利主義の政治哲学の系

譜、フランスのヴォルテール、モンテスキュー、コンドルセの歴史哲学の系譜は、共に理性と自然権の普遍性と先験性を人間の生得的権利と指定するフマヌスの哲学を基盤としながら、その帰結においてヘーゲルのな東洋世界に対する西洋世界の優越、いかえれば西洋価値の絶対性の理論樹立の方向に帰着してしまう。

西欧近代思想は、その政治哲学的な方向においても歴史哲学的な方向においても、理論的な形式原則においては、「進歩」の観念のもとに人間の歴史的發展、特定地域や特定の間集団の範囲を越えた「人類史」、「世界史」という全地球的な範囲と規模に拡大し、いわゆる人間の歴史的思考においてはじめて「グローバルイズム」の思考と価値基準の設定を始動させたのである。しかし、それは帰結から見れば、引用した文章だけに限定しても、ベーコンの『ニュー・アトランティス』とヘーゲルの『歴史哲学講義』はそれぞれまったく異った要請と文脈のなかで生み出された作品でありながら、西欧の近代価値がその内在的な思考原理と思考要請において、全世界に対する優越性と支配の正当性を主張する方向性を潜在させていたものであったことが読みとれるのである。

ミュージアムは、その思想と制度の出発点にあって、

ミュージアムの思想と制度

人類の進歩を理念的に標榜しながら、帰着点においては国民の自負の発揚と国民という集団的な組織のアイデンティティの形成の中核的な施設となっていくのである。つまり、ポミアンのいう「国家が同時に主体となり客体となるような祭式」を執りおこなう場となり、「国家が国家自身に捧げる恒常的敬意」のために特定の価値物を集積させる施設や機関として、つねに内在的な価値の拡大の要求を潜在させているものとなっていく。いようなればミュージアムとは、人間の歴史を進歩の観念で捉える思想の産物として、つまり歴史を人類の「進歩」とその進歩を理論的に論拠づける概念枠としての「文明」と「文化」という近代価値基準に則して人間活動全体を秩序する施設と機関として出発しながら、その帰着点においては「国家」や「国民」というナショナルイズムの要求と主張をも共存させる施設と機関ともなったのである。「人類」とは理念的に提示された公準であったが、「国民」とは現実的な歴史経過のなかでの実体的な観念形成の要求によって生み出されたものである。「国民」は、まさに高度に組織されたイデオロギー的集団である。平常は相互に物理的な凝集を欠く、非組織集団を呈しているが、いったん国家イデオロギーのもとに結集されると、

六二七 (六二七)

戦時中の「非国民」の烙印が教えてくれるように、強力な物理的な凝集をはたし、他のいかなる組織よりも排他的で、独善的な組織にもなりうる。それは国家的祭礼、祭祀においてもっとも明瞭な形をとって現わされる。だが近代国民国家は、旧体制下の「臣民」をいきなり国民に変貌させ、人民を直接的に「国家主義者」へと転換させることはできない。そこには人民を主体的な共同体の担い手とする「市民」という媒介項が必要である。つまり人民や民衆は、いきなり「国民」となるのではなく、理論的な人類共同体の成員としての人格的自立性を与えられた「公民」、「世界市民」を媒介項として、「国民」へとイデオロギー的な結集を果していくのである。

ミュージアムとは、フランシス・ベーコンが驚くべき先見性を持ってその著『ニュー・アトランティス』、とくにソロモンの館という多面的で、複合的な研究機関と展示ギャラリーのなかに集合させた思想が、西欧の近代社会のなかで具体的な制度と施設として実現されてきたものである。今日では、現実のミュージアムはその思想、機能、制度、施設においてベーコンの構想を超えるものになっているが、やはり、その最初の明確なプログラムと設計図はそこに由来するものとしなくてはならないだ

ろう。なぜなら、ベーコンのミュージアム構想の基礎となっているのは、伝統主義と権威主義社会をささえる伝統主義的思考を脱して、「進歩」の観念によって未知の領域に人間の思考を導くために知的好奇心を覚醒させ、それが単なる空想領域のものにとどまらないため、合理主義精神と分析、実験による学問的真理の確認に向かわなければならないという思想の呈示だったからである。

ベーコンのミュージアム構想は直接的にはブリテイッシュ・ミュージアムの開館理念と諸種の科学、技術系ミュージアムの思想につながるものであるが、さらには「博覧会」(エクスポジション、エクシビション)にも、またさらに人文系、美術系ミュージアムのコレクションと展示の思想の根幹にまでつながっている。つまり、「みたい」という人間の欲望と「みせる」という展示形式がもっとも一般的な形で接点をもってくるのは、「みせるもの」という営利行為が典型的であろう。だが、非営利的な行為として「みせたい」という意志が「みたい」という欲望を喚起させ誘導する制度は、西欧近代国家においてはじめて政治手法として確立されたものである。その代表的な形式がミュージアムであり、博物館であるが、それはひとつの見たいたいという欲望が主体的にひと

つの方向を選択したために生まれたものというより、近代国家がその国維持のために案出した政治手法のひとつの形であるといえるのである。

国家が人民や民衆を直接的に支配する手段として最も有効な方法は専制支配であり、次に有効なのは絶対主義的支配方法であろう。だが、西欧近代国家のように人間の生得的自然権を承認し、法治主義と議会制民主主義、さらに進んでは主権在民の国民主権へと発展していった国家体制のもとでは、国民や民衆の直接支配は困難であるばかりでなく、非効率的でもある。近代国民国家において最も有効な政治手法は国権と私権の対立の調整機能としての「公共圏」の形成である。その公共圏とは、国権の私権に対する過度なる支配や干渉に対しては世論（輿論）の形成をもって、反発、対抗しうる社会的勢力圏の形成と維持を意味し、私権の過度な主張や要求に対しては、国家の側からの国民全体の利益の増進と調整の必要性としての「強制なき指導理論」の呈示となるものである。

いふならば西欧近代国家と社会の政治政策とは、理念的には良識ある公共圏の形成とその公共圏を通じての公正なる世論形式によって、国権と私権の要求を調整する

ことである。その手段として最も有効な方法と考えられるのは、近代初期においては新聞、雑誌、パンフレットなどの言論メディアの言論活動とミュージアムや博覧会による大衆（民衆）誘導と国民のアイデンティティ形成活動であったといえる。前者の言論メディアによる世論形成活動は市民社会的勢力圏が最も有効に活用しうる手段であり、後者のミュージアムや博覧会は近代国家が創出した一種独自の祝祭空間や祝祭形式の形成という視覚メディアとして国家がほぼ独占的に活用しうる手段である。先にのべたように、「国民」は「民族」のような自然成長体ではなく、高度に組織されたイデオロギー集団、つまり民族のような有機体的な擬制的血縁集団ではなく、契約国家観が示しているような一種の「幻想の共同体」（アンダーソン）である。<sup>10</sup>そして、この幻想の共同体を組織しうるのは近代の国民国家のみである。

テンニエスの用語を使用すれば、近代国民国家とは、国民というまったく新しい近代的な「幻想」を創出することで、人間を国民に結合するイデオロギーによって組織された、最大のゲゼルシャフト的人間集団である。いかえれば近代国民国家は、近代国家が人間の最高の集合理念<sup>イデア</sup>として呈示する法的組織体としてのゲゼルシャフト

トの形成理念である。そしてそれは、民族というゲマインシャフトとしての擬似血縁組織を国家理念から排除するのではなく、それを巧みに国家理念のなかにすべり込ませ、ゲマインシャフトの理想とゲゼルシャフトの理想と融合させることで、国家イデオロギーを形成していく。つまり、国家イデオロギーとは、国家が普遍妥当な価値として捉えている觀念形態を論理的に呈示するのでなく、それを人間の心理的内面形成にすべり込ませることで、その価値の浸透をはかる方法と理論ということになる。

いいかえれば普遍妥当な価値として捉えられている觀念形態、つまり国家が規定している社会的、経済的、法的な外在的な諸要因を自らの裡に取り込むことで、流動的につくり変えられうる形で呈示される近代国家理念の自己承認要求なのである。

近代の国民国家が、前近代の絶対主義国家の「臣民」を「国民」に改変させるためには、前近代社会に存在しなかった「公衆」という国家権力と私的権力の中間地帯に、「公共圏」というゲゼルシャフトを新たに形成しなくてはならない。だが、この「公衆」という人間の存在形態は、直接的には「国民」につながるものではなく、国家を超えた「世界市民」、「人類」の理念につながるも

のである。この「公衆」と「国民」をひとつの理念において再結合していくのが、「ミュージアム」という思想であり、制度なのである。

ミュージアムとは、ポミアンがいうように「ひとつの社会のすべての構成員が同じ祭式を執り行なうことで一致共同する」国家祭式の間であり、その祭式とは、「国家が同時に主体となり客体となるような祭式で、国家が国家自身に捧げる恒常的敬意である」。さらにミュージアムは、エルンスト・ユンカーが独自の直観力で感じとったように、単なる施設や機関という存在を超えた「ミューゼアルな衝動力」そのものとして、世界を西欧の近代価値によって一元化していく衝動力そのものであるといえる。その衝動力とは、世界という地球の地表全体を聖域化、タブー領域化していく、世界のミュージアム化の思想の拡大力のことである。それは「世界遺産」という制度成立以前に、その制度の出現を予見したものであった。その予見は、「ここで問題なのは、ミュージアムの衝動力が副次的なものにまで侵入する領域である。この衝動が最もはつきりと最大級のタブーの形をとってくるのは自然保護と文化財保護の領域である」という表現のなかに端的に表明されている<sup>11)</sup>。

いくなればミュージアムは、ひとびとを「国民」に収斂させていくベクトルとひとびとを「世界市民」に開放していくベクトルという両方向の力をもった思想である。ミュージアムとは西欧近代思想がつくりあげた最も巧妙な制度である。なぜなら、それは強大で測り知れない破壊力と浸透力を有しながら、その破壊力と浸透力をほとんど感じさせない巧妙なシステムを自らのうちにつくりあげている制度だからである。それは人がその外見に容易に欺かれる制度といふべきものである。

#### 註

(1) コレクション制度としてのミュージアムは、中世の宝物室、聖遺物室や絶対王政の宮廷におけるクンスト・カンマーやヴンダー・カンマーのような帝権や王権の正統性を象徴論的、記号論的に整序しようとする目的から切り離されて、近代西欧思想が新たに発見した「人類の進歩」という観念を基盤として、人間の精神の発展のプロセスを「文明」と「文化」の概念で捉え、さらにそれを「歴史」、「科学」、「技術」、「芸術」という新しい価値概念群で再整序し直そうとする思想から生み出されたものである。いいかえればコレクションの制度の延長線上にあつては、西欧の中世と近世の宮廷コレクション基盤としながらも、思想的な主張としてのミュージアムは、「世

ミュージアムの思想と制度

界」を神の被造物としてではなく、人類の進歩の活動舞台と見る考え方から、人間の歴史を科学、技術、芸術の発展の相から、つまり、文明と文化の概念の相から再整序する思想である。その思想的主張は一七五三年のブリティッシュ・ミュージアム法の成立から今日のユネスコのミュージアム法にいたるまでの西欧諸国の全ミュージアム法の理念のなかに一貫して保持されてきている。

(2) ユネスコの「ミュージアム規約」の訳文は西野嘉章氏の『博物館学—フランスの文化と戦略—』（一九九五年、東大出版会）の訳文を借用させていただいた。

(3) Jünger, Ernst: Das Abenteuerliche Herz. Zweite Fassung 1938. Sämtliche Werke Bd.9 (Klett-Cotta) 1979.

(4) Sedlmayr, Hans: Verlust der Mitte. Die bildende Kunst des 19. und 20. Jahrhunderts als Symptom und

Symbol der Zeit. 1948 (Otto Müller) Salzburg. ハンス・セーデルマイヤー『中心の喪失—危機に立つ近代芸術—』石川公一、阿部公正訳 一九六五年 美術出版社

(5) Schrade, Hubert: Das ästhetische Kirche 1936.

(6) Pomian, Krzysztof: Collectionneurs, amateurs et curieux 1989 Paris. 邦訳は『コレクション—趣味と好奇心の人類学—』一九九二年 平凡社 吉田誠、吉田典子訳

(7) フランシス・ベーコン（一五六—一六二六）の『ニューアトランティス』は死後1年の二七年未完の著作

『New Atlantis A work unfinished』として出版される。その後無数のテキストが存在し、邦訳も多数存在する。なお引用の訳文はパオロ・ロッシ『哲学者と機械』一九

八九年学陽書房の伊藤和行氏の訳文を借用させていただいた。

(8) 引用文は文中で明記しているように、『ヴム・オルガノン』(新機関)からの引用であるが、この著作は彼の他の著作と同様、彼の同時代と前時代のヨーロッパの科学思想の権威主義が、規範主義的思考の批判を目標としている。権威主義・規範主義の科学的思考とは、アリストテレスやガレノスといったギリシアの科学思考を絶対的な権威・規範として信奉し、それ以上の科学的思考の発展を不可能と考え、科学や技術の進歩を容認しない思想である。それはいいかえれば、アリストテレスの「技術は自然を超えることができない」というテーゼ、つまり「技術の所産と自然の所産との間には本質的な相違は存在しない」というテーゼを承認していく思想である。これに対して、ペーコンは「技術は自然を改変し、自然を凌駕しよう」というテーゼを提出する。この思想こそが西欧近代技術思想と科学思想の展開の基礎となり、さらには人類の進歩を人間精神の進歩と人間社会の物質的生産の増大の歴史とみる、西欧近代のミュージアム思想の基礎となる。

(9) ヘーゲル『歴史哲学講義』 岩波文庫 長谷川宏訳  
本書は一八二二年から三一一年までのベルリン大学での五回の講義の草稿をもとにして、聴講生のノートと対照させて一八三七年版と三年後の一八四〇年のガンス版の改訂増補を基礎にしたものである。

(10) Anderson, Benedict: *Imagined Communities, Reflex-*

tion on the Origin and Spread of Nationalism. 1983 Revised Edition 1991. 初版邦訳は白石隆、白石やや氏によって一九八三年、リプロボート社により「想像の共同体」ナショナルイズムの起源と流行」という表題で出されている。増補改訂版も一九九七年に同じ訳者によって N T T 出版社より出されている。

(11) 二〇世紀ドイツにおける最もラディカルな「近代」批判者としてのエルンスト・ユンガーは、「ミュージアム」という思想を西欧の「近代」価値以外の諸価値に対する最も大きな破壊力を秘めたものとみなし、その破壊力を「ミュージアル・トリープ(ミュージアムな衝撃力)」と呼んだ。なぜならミュージアムとは美術館や博物館、動物園、植物園という限定された施設や設備にとどまらず、その領域をたえず拡大させ、人間の日常生活の領域にまで浸透、侵入して、そのなかに特定の聖域(サンクチュアリ)やタブー領域を形成し、伝統的な生活の改変や禁止を要求してくるからである。一例を挙げれば、イルカやクジラの捕獲禁止であるが、その自然保護という思想が広く浸透し、強力な強制力を持つと、その捕獲を生活手段としてきた人々の生活は大きな打撃と変更をこうむることになる。

ミュージアムの思想はこのように単なる設備や施設や期間内の範囲にとどまるのではなく、人間の生きた生活の領域内に「人工的な死」の領域を設定する思想でもある。したがってユンガーは本文中の引用文につづけて次のように言う。「このようなパースペクティブの中では、

われわれのミュージアム王国と大いなる死者礼拝と墳墓礼拝の間にある類縁関係が明らかになってくる。われわれのミュージアムのコレクションの大部分を地下に移し置いてみるなら、この事実はもつとはつきりしてくるにちがいない。ミュージアムの衝撃力のなかには、われわれの学問の死の側面、つまり、生と休息と不死性のなかに横たえさせようとする傾向が現れてきているのである」と。

このユンガーと同一の思想を「Fアドルノもその著『プリスマン』（一九五五年）というエッセイ集の中の「ヴァレリー・ブルースト・ムゼーウム」の中で次のような言葉で敷衍している。「ムゼアール」というドイツ語の言い回しには、不快な調子がある。このことばは観察者が対象物に対して、もはや生き生きとした関係をもたず、それ自身が死につつある対象物を指示している。それらは現代の必要よりも歴史的配慮のために保持される。ムゼーウムとマウソレウム（墳墓）は単に音声上の関連で結びあっているのではない。ムゼーウムとは芸術作品の累代の墓所である。」

ミュージアムとはまさしく死者礼拝の形を借りた、日常生活内における禁止領域とタブー領域の設置、設定を可能にする思想である。